NO ９５

１学年だより

令和３年10月４日（月）

夢の宅配便

１年学年主任
水野　喜代治

新生徒会会長・副会長が決定しました。

選挙ポスター

令和３年度の生徒会役員選挙が１０月１日に行われました。１年生にとって生まれて初めての選挙だったと思います。会長は２年生の島﨑さんが選挙せずに当選となりました。副会長は激戦で、１年生３人、２年生３人の６人が立候補し定数２名の枠をめぐって選挙戦を繰り広げました。毎朝、昇降口での呼びかけ、意見放送、立会演説会など一所懸命に自分のマニフェストを訴えました。６人の立候補者のうち４人は落選するという厳しい選挙でしたが、立候補した人は精一杯に選挙運動をしていたと思います。結果は、１年２組の駒さん、１年３組の朝倉さんが当選しました。今回の選挙を通して、あらためて１票の重さが認識できました。朝倉さんと２年生の池谷さんが同じ得票数でした。開票を見学していた生徒も同数に対してどよめきが起きました。

記載台で投票する１年生

教師を４０年以上してきて、得票数が同数だったのは、初めてでした。「どう決めるの？」と見学している生徒から思わず声が漏れました。「もう一回、決選投票をするのかな？」という声も上がりました。私がすぐに小田原市選挙管理委員会に電話で聞きました。図書室（開票所）がシーンとしました。電話の向こうで選挙管理委員会の人が「会場責任者がくじを引いて決定します。」と答えてくれました。電話をスピーカーにしていたので、それを聞いてみんが驚きの声をあげました。選挙管理委員長の３年生の徳尾さんが「無心でくじを引きます。」と緊張した手でくじを引きました。「朝倉さんです。」とくじを読み上げると自然と拍手が起きました。

今回の選挙は新型コロナウイルスのワクチン接種で早退するなど、金曜日の６時間目に投票できない人も多く、体調不良なども含め、２１名の生徒が期日前投票を行いました。また、１年生の男子生徒が足の怪我をして選挙当日の日に欠席でしたが、お父さんが車で学校まで乗せてくれて、投票だけを行いに登校して、自分の持つ一票を大切にしてくれました。また、３票の白票（誰の名前も書いていない）がありました。この白票がもし、白票でなく投票者を決められていたら、結果は異なっていたかもしれません。一人ひとりの一票がいかに重いかが実感されました。新しく誕生した生徒会をみんなで盛り上げていきましょう。

連載小説 第二編
「キヨたんの小さな小さなダイヤの指輪」
第１話…おねだり

・空に絵の具を塗ったような青空が広がっている。来週から夏休みである。学校は、午前中の日課になり、大掃除や集会などを行い授業も無いので、キヨたんの心は一足先に夏休みに突入している。ただし、この夏休み前の特別日課の期間は、生徒にとって緊張する日々でもある。なぜなら、午前中で授業が終わり、午後は保護者と担任の先生の面談が行われているからでる。この面談で、生徒は４月から今日までの行いが評価され、赤裸々に保護者に告げられる。まるで、判決を言い渡される被告人ように生徒はビクビクしているのである。掃除の時間に、ホウキをバット代わりにして振り回して折ったこと、プールにドジョウを大量に逃して遊んだこと、中庭の二宮金次郎の銅像の鼻の下にマジックで鼻毛を書き込んだことなど、ちょっと一学期を振り返っても叱られたことが走馬灯のように次々に思い出される。まるで、トランプのババ抜きのような感じで、先生がどのカードを引き抜いて親に話すのかドキドキする。面談期間中はそんな事もあって、いつもなら、キヨたんと一緒に悪戯をするブーもトンカツも模範生を演じている……　。

母が面談から帰ってきた、演歌を歌いながら自転車に乗って帰宅した。演歌を歌っている時の母は、ご機嫌のときである。「おかえり」と母をおそろおそろ出迎えると、「喜代治、ピカピカの自転車だよ。」と母が大切そうに自転車を見つめて話した。「自転車買ったの？」と確認すると「今までの自転車が、もう古くて、報徳橋の坂を登るのが大変だったので、ギア付きの自転車が欲しくてね、ちょっとちょっとお金をためていたんだよ。」と笑顔で答えた。「お母ちゃんかっこいいよ！この自転車すごいね！」と自分のことのように嬉しくなって大きな声で言った。いままで、海底から引き上げてきたようなサビだらけの自転車で一生懸命に仕事場に通っていた母が、可愛そうだった。時々、母の自転車の後ろに乗って、栢山駅に行く途中の報徳橋にさしかかると、ギーコ、ギーコと音を立てて母がペダルを踏み込む。「喜代治、お母ちゃんの背中を押しな！」と母が言うので、ペダルを踏むタイミングに合わせて、「よいしょ！よいしょ！」と大きな母の背中を押した。坂を登り終わると「どっこいしょ！」と必ず母が言った。「お母ちゃん、足痛くない？大丈夫なの？僕が大人になったら偉くなって、この橋の坂を工事して平らにしてあげるね！」と言うと、「あはは！そんなに偉くなったらお母ちゃんは嬉しいよ！」と笑った。新しい自転車でさっそうと報徳橋を登る母の姿が頭に浮かんで嬉しくなった。それと同時に、面談で担任の先生が何を母に言いつけたのか、夏の空に真っ黒な入道雲がモクモクとするように不安が広がった。

「お母ちゃん、今日は僕の面談だったでしょ！叱られたの？」と不安そうに母に尋ねた。「大丈夫だよ！昨年の運動会以来、授業もサボらないで頑張っているから、先生も褒めていたよ。後は勉強を頑張ればいいですねと言われたよ。」と母が自転車のベルを鳴らしながら優しく言った。「そうなんだね、良かった。もう僕は、授業を抜け出さないよ！でも、勉強はどうすればよいかわからない。先週の算数の時間にりんごはいくらですか？と聞かれるから、一番最初に自信満々に手を上げて、５５円と答えると先生が式は、どうやって計算しましたか？って聞くから、そんなもの計算いらないよ、昨日鈴木屋商店で５５円で売っていた。と答えると教室中が爆笑の渦になっちゃうんだ。」と授業中に頑張っているけど空回りしている様子を母に伝えた。「いいんだよ。気にしなくても、りんごの値段が計算できなく、わからなくても、お母ちゃんの気持ちをわかってくれる喜代治が一番の自慢だよ！」と褒めてくれた。テストで０点をとっても母は、「喜代治、０点ではないよ。得点のところに丸が一つあるよ。」と笑顔で励ましてくれた。「お母ちゃん、それは得点で、丸でなく数字の０だよ！」というと「人間は全部バツにはならないんだよ。必ず一つはマルがあるんだよ。」
と説明をしてくれた。そんな母だから、通信簿が１．２・１．２と体操の掛け声のような数字が並んでいても何も注意をされなかった。

母が一人で働いていたので、生活が苦しいことは薄々分かっていた。自転車を買うのに少しずつお金を貯めて、やっと買えた母の喜ぶ気持ちも理解できた。私は、小さいときから、欲しい物をおねだりすることがどんなに母を困らすことか分かっていた。だから、自分が欲しい物があっても「〇〇買って」と気やすく甘える事ができなかった。でも、私の心の中で、どうしても手にしたいものがあった。それは、自分にとってとても高価なものだった。母の新品の自転車を見て、思わず、母に欲しい物があると口を滑らしてしまった。

つづく